

都市を描く

板坂, 耀子
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10407>

出版情報 : 文献探究. 22, pp.1-12, 1988-09-20. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

都市を描く

板坂耀子

1
本稿は、近世の紀行文における都市の描写の実態と、その意味するところについて、検討を加えようとするものである。

どのようなものをさして、都市の描写とするのかという定義も必要であらう。前田愛氏が「都市空間のなかの文学」(筑摩書房刊)の中であげられた鷗外や漱石、バルザックやドストエフスキイらの町の描写、有名な西鶴の「日本永代蔵」巻一、「浪風静に神通丸」の大坂の町の描写などはじめ、作品全体の中で、ロシアやヨーロッパの諸都市の描写がかなりの比重を占める宮本百合子「道標」では機はじき、トゥウエルスカヤの大通りと平行してモスクワを縦にとおっている一本の街すじへ出た。そこは電車の通っていない商店街だった。パン屋。本屋。食料品店。何さうっているのか分らないからんとした幾軒もの店。ショウ・ウィンドウが一面白く凍っている花の色も見えない花屋の店。店の前のせまい歩道では防寒用に綿入水の半外套を着、フェルトの長靴をはき、ふくらんだ書類鞆をこわきにかかえた男たちが、肩や胸を雪で白くしながら足早に歩いている。茶色の毛糸のショールを頭から肩へかぶった女たちが、腕に籠せとおして、ゆっくりに歩いている。向日葵の種をかんで、そのからを雪の上へはき出しながら散歩のようにゆく少年がある。その街は古風で、商店は三階建てで雪の中に並び、雪の匂いと微かな馬糞のにおいがしている。

この老婦人が馬車でわたしを連れしてきた町は、わたしがこれまで

住んでいたところとはたいへんなちがいでいた。いわゆる、寺院の町とよばれているところだ。ここでは空気を黒くよごしたり、木をいためつけたりする工場の煙というものが、まったくありませんでした。朝早く地の底の仕事場にいそぎ、夜は疲れきったからだをひきあつて帰ってくる炭坑夫の群も見られません。この町の生活は、平和で、ゆつたりとして、快適でした。町のまん中には、古めかしい寺の灰色の姿が空にそびえ、お寺の鐘つき堂の中に菓をつくっているカラスたちが、そのまわりをぐるぐると、飛がまわっているのでした。お寺の鐘は一時ごとに低いやさしい音をひびかせて、さらに十五分ごとに、かわいい音の鐘がちよとだけ鳴りました。きれいな庭にとりかこまれた、かつしりとした古い家がたくさんありました。——しかも、家の建て方はいろいろさまざまで、変化にとんでおりました。(ロフティング「ドリトル先生と緑のカナリア」 井伏鱒二訳)

のように創り出される架空の町などを、考えておきたい。このように、その町独特の特徴をとりえて、町と、そこでの人々の生活を描くことは、近世の紀行文の場合、どのようになされていくか。

膨大な作品群の、傾向を見る一つのめやすとして、明治期に岸上賢軒が編じた、帝國文庫「続紀行集」、「続々紀行集」に収録された全紀行に、都市の描写というべきものが、どの程度含まれているかを見たい。それは概ね別表の如くなる。中世以前には少かった町の描写が次第に増加し、内容も詳細になっていく傾向が、漠然とだけ見てとれよう。

ところで、紀行文が旅の文字である以上、それは、旅先の土地を
描くものである。したがって、都の人か地方へ行く紀行文では、そ
して、その地方に、町らしいものがないならば、紀行文に都市が登
場することはない。

換言すれば、地方の人が都へ行く紀行文が登場し、あるいは都以
外の地方に町が発生してくれば、紀行文に都市の描写はあらわれる。
そのような観点から見のかせないのは、近世初期に盛行する江戸
下京都の案内記である。それらの書の序文には、次のように創作動
機が説明されているものがある。

暫く時移つて後、国の人我に問ていわく、我はるくくの道すから、
うき難所を越過て、汝に今逢ふ事は、偏に上君の御政道たしき
ゆへならず、そもく過つる中頃までは、此地へ来なん人あれ
ば、皆人怒ふる事堪に忍びかたし。今はいつしかひきかへて、隣
歩のごとくにして往還の煩ひなく、みな人此武江に着り。然るに
我に等しき旅人の下着して後、寺社名所武家屋敷町小路を一見仕
待らんよ云ひも、第一方角をしらず。殊に道筋唱斜として堅横道
ならず。去るに依て往来しかたし。汝我ために是を教へてんやと
云。予答て云、我もと当地の者にあらず貴迎と同国たり。此地へ
来て星霜をふる事十余年に及べり。故に有まし所々の順道をし水
り。我朋友の案内に、武家屋敷民家の町等をしるさん。(近行遠
通接・麦川師宣画「江戸雀」近宝五刊)

栄ゆく花の御江戸にすみける事こそうれしけれと、古郷の事も
打心れて年月を送り侍る所に、旅の者とうち見へたる男、ふと尋
ね来しぬ、笠をぬきけるで見れば、古郷のいとこにてそ有けり。
夢の心地して、是は何政爰には来り給へるぞといへば、彼者申様
さればとよ、在所にては、御身の御両親、われらが父母まで、其

方の事明暮いかかとあんどくらさ水けるか、次第に年もよりけれ
ば、呼下し、家督をもゆつり、隠居の身となり、安泰に月日をも
送り度との願、(中略)とかく互に無事無難なる内に父母の願を
叶へ給ひてこそ、孝行にもなりなると、強ていさめけるにぞ、打
つれてくだるべきにきはめぬ。扱むかし今の恋しゆかしの物かた
り過て後、彼もの申やう、そなたは数年當御地に住馴給ひぬれば、
町中はおよはず、神社仏閣迄、残らず見たまひつらんか、わ
れは此度初てのぼりければ、東西南北をもわかつた、此ま、帰り
なんほいなき事せ。此序にしはらく逗留して、あなたこなたを
見めぐり、此物がたりを古郷のみやげにもせばぞと思ふ。ちか
比大儀には有べければ、道しるべしてたべかしと申ける程に、わ
れも年久しくは住ければ、世わたるわざに取まき水て、こまか
に廻り見る事なし。然れどもそなたには少しまざりぬべし。旅のつ
か水さしはらくはらし給へ、道筋をばあなひ申べし。まぎらばし
き所は人にもたがぬきくべきぞかし。我も幸とこそおもへ、在所
にて人にとはれ、あいさつめてにはあしくば、めんほくなかるべ
きに、よくぞおもひ立給小物かなとて、互に打まみて其日はす
でに打過ぬ。(増補江戸咄「元禄七刊」)

新しい都市である江戸の住人の多くは、すなわち地方出身者であ
る。江戸の人といつてもそれは、比較的長く住んだというにすぎな
い。同郷から出てきた人に対し、そのような江戸人か、江戸を説明
するといふかたは、これらの名所記は綴られる。ここでは、都を
訪れる地方人が観光する対象として都はある。それも、地方の人の
驚きによつて都のすばらしさを表現するといつたものではなく、あ
くまで地方の人の立場から、観光の実用に供するものとして記述は
なされていくのである。

だが、都によつてきた地方人そのものが書き手となつて都を描写

する紀行文は、別表の「東めぐり」(寛永二〇)などの例はあるものの、この時点ではまだきわめて少い。

3

ここで、そのように、紀行文内部において徐々に、地方から都市へと視線が逆流していく例として、二人の紀行文作家の場合を見てみたい。一人は、近世前期に「本曾路記」「諸州巡覽記」をほじめとした紀行文の名作を多く残した貝原益軒、一人は近世中期に「菅笠日記」という、やはり紀行文の名作を記した本居宣長である。

益軒は主情的であつた中世以前の紀行と異り、地誌的な記事の内容の豊富さを主とした。近世紀行の基礎を作つた。宣長は、その益軒の影響もうけつつ、「菅笠日記」では、再び個人的な記述を中心にしつつ、それを地誌的な内容と結合させて、散文学としての紀行文の最もすぐれた典型とした。

ところで、益軒紀行を出版した京の書肆柳枝軒が、最初に出版した益軒のこの種の書は「和州巡覽記」「京城勝覽」といつた奈良や京都の案内記であり、これが好評を博したため「本曾路記」「諸州巡覽記」等の出版となつたのであり、書型や内容の体裁にも前二者と後二者に変化はない。柳枝軒の意識でも、こゝらは同種のものとしてあつたろう。しかし、今日、益軒紀行を検討する際は前二者は省かれることが多く、私自身、こゝらも紀行文として、とり扱つては来なかつた。

また、宣長は「菅笠日記」の他にも多くの日記類があり、とりわけ京都滞在中の日常を記した「在京日記」はきわめて整つたものであるが、これも、紀行文として扱われたい例は私は知らない。

しかし、あらためて、そゝらの内容を比較してみると、丸山安養寺といふ。妻帯なり。祇園の東、長樂寺の北なり。僧坊多し。尤高き所なり。景よき坊多し。此寺も精神料理(3)を人の所望

によりて拵出す。遊藝、むめ漬、かき餅、豆腐、此寺の名産なり。遊人多し。冷泉有。

の如き「京城勝覽」の記事と、

八尾町頗ひろく、潤屋多し。初日山常光寺とて大寺あり。本尊地藏は、小野篁作せし云。又大信寺とて、親鸞宗の大寺あり。本堂は方十一間、縁は各二間有。

といつた「諸州巡覽記」の記事、あるいは、

十一日、朝まだきにやよりそたちて、岡寺にまうづ。里より三町ばかり東のやまへのぼりて、二王門あり。額に龍蓋寺とあり。この岡よりまへの道の左のかたに、八幡とて社もあり。

のような「菅笠日記」の記述と、

十八日、けふは神樂あらしひ、日よりいとよし。村田氏よりさそはれて、藤代屋が別宅の、安井まへの北の方にありけるにて、ねり物見侍る。伊兵衛と高木利兵衛と予と参りける。けふはてんきよけふは、いとにきはしく、人多し。

という「在京日記」の記述の間には、執筆態度や意識において、さほどの差が見うけられぬ。

益軒は益軒の、宣長は伊勢の、いづれも地方の出身者である。二人にとつては京都も奈良も、いつてみれば旅先であつた。彼らか、そこで見聞したものを、地誌あるいは日記という形式で記すとき、それは彼らのいわゆる紀行的作品ときわめて区別のつけにくい存在となつてくる。

このような作家たちの登場は、少くとも紀行文と、そうでない作品と、描かれる対象の土地によつて区別する意味を失わせる。その区別は、一人々々の作家によつて、日常と非日常の意識とは何か、生活空間と異境との差がどこで生じるかといつたことにかかわつて来よう。芭蕉の「嵯峨日記」さどうとらえるかにもつながら、大き

な問題であると思う。

紀行文とは何かについての早急な定義はここでははしない。ただ、そのような作家が登場し、そのようなかたちで都市が描かれることは、おそらく、近世後半に、明らかかな紀行文の形式で内容を持ちながら、都市の描写も多く有する作品が増加することに、つながっていくように思う。

4

だが一方で、別表に▽で示した「藤川の記」あるいは「たびの命」の記述にもみるように、人の知らぬ賑やかな場所は興ざめであり、紀行文の題材としてふさわしくない卑俗なものであるとの意識は、紀行文の作者たちの中に、根強く存したと思われる。また、紀行文としては先例の少い都市の描写は、ともすれば作品中で、みそらくは人々の既存の知識や地名自体の有する魅力に依存した、次のような羅列におわることも多い。

松屋町今出川町などいふ所を西ざまにあゆみつつ、御所の御構のうちにいり、仙洞御所、女院御所、禁裏の南門、から門、公家内、台所内などいへる御門ある御築地のもをみめぐりて、(中略)いそぎ賀茂川をわたり、下賀茂の社吉田の社とをくみやり、聖護院の宮の前より南禅寺にかゝる。(大田南畝「壬戌紀行」享和二)

廿八日、長樂寺をはじめに双林寺なる西行上人康頼入道阿法師の墓、高台寺八坂の塔、靈山清水寺清閑寺泉涌寺今熊野などめぐりて、蓮花王院より方右寺にまうづ。(紀年「茅野記行」天保五)

このような点を、近せの紀行文が克服してゆく手がかしの一つとなつたのは「京都・江戸・大坂に長崎を加えてそれ以外の遊所の長所をあわせ願う」というのが、延宝三年(一六七五)以来、いく

つかの本に引かれる。江戸は、京都とありならび、京都にない独自性をもつ都市という見方の存在を示す。L(塚本学「近世再考——地方の視点から——」L1、「江戸における中央と地方」と指摘されるような、三都を中心とした都市の比較論の盛行であった。

塚本氏は同書の中で、救世徂徠の学風と、江戸文化との関係について述べている。日野龍夫氏も「唐詩選の役割」(荻原書房刊「徂徠学派」所収)の中で、「近世後期の人々がこゝろこそ古文辞学派の詩風の特徴と把握していたのが、権掇剽竊とともに、都市の繁栄との同化ということだつた点に注目したい。Lと、徂徠の姿勢が都市文化を拒否しないことを述べられる。徂徠学派の流行を思うとき、このような徂徠の態度も、紀行文における都市の描写に何らかの影響は有するかもしれないが、それを検討する暇は今はない。

むしろ、おそらくは徂徠のそういう姿勢を生む基盤ともなつたであろう、新興都市江戸の隆盛と、そこに住む人々の満足と自信を確認しておきたい。

橋のうへは、貴賤上下のほる人くだる人、ゆく人帰る人、高のり物人の行通小事、蟻の熊野まみりのごとし。あしたよりゆふへまで橋の両わき一面にふさかり、せし合もみあひ、せき合て、しばしも足をたためて立とまる事あたはず。うかくとこまへたるものは、ふみたてさ水、蹴たてさ水、あるひは帯をきられて刀わきおしやうしなひ、あるひは又きんちやくをきり水、又は手にもちたる物をもきりしられ、たましく見つけてそれといはんとするに、人だまひの中に、立まき水て跡を見うしなふ。(「江戸名所記」

卷一 寛文三)

かちにて行人は、ちりけもとまで塵をけたて、むりにあとなる人に押たてられては、足をとがめ足が、橋をわたリ、騎馬乗駕の人は跡をかへり見ることもあるたわわして、従者のあやまちながらん

事をつつしみ、橋のおもてひたすらにふさかりて、おし合もみ合
てしばらくも足とどめず。(江戸地底子名所大全) 卷一 元禄三
近世初期、江戸の中心である日本橋の繁華はこのようなものであ
った。この都市を訪れる田舎人を「慶長見聞集」は次のように描い
ている。

見しは今、江戸繁昌にて屋作り家風尋常に、萬美々敷事前代未聞
な水は、田舎人見物に来り群集をなす。(中略) 然に田舎人江戸
を見物し、帰るさ夜所へのみやげ物をかはんとて、室町を見めぐ
りけるに、からあやの狂丈、唐衣、朽葉地、むらさきとんず、リ
ん布、きんらん、にしき色々様々の美震なる物どもを、つまかさ
ね、ふけんさ小なる人たちのならび居て、何をかめす御用かよ問
ふ。田舎者の事な水は、はつかしかほにて、物かはんといひ出さ
ん事は思ひもよはず、見せの方さばまじりにかけ、腰をくゞめ
御免候へ〜と、ふるへ〜 棚の前を通り行計にて、立とゞ
まり物かふべき所なし。

これは、事実に近かつたろう。このような描写には、これほどに
人で圧倒する江戸の隆盛への羨しけな誇りが感じとれる。時代は下
るが更にそれは、平糶東作「葎野芝談」の、
東都などの如き繁栄の地に生れたるは、まづその人の幸といふべ
し。王城に生水しを三葉の一つにかむへけん、げにこはりぞか
し。(中略) これを思ふに、遠国などの農民、または樵漁の属、
みなじく蒼天を戴、租税をおさめ、後役をつとむ、衣肌を覆ひか
ね、豊年といへども糠にひとしきものさくひ、足手はひ、ありて
いつか春やら桜も紅葉も目にて見るばかり、地獄の中に劫敷を經
る罪人にひとし。

との断定をすう生む。

新しい都市である江戸の、こういっただ自信は、何疑的な都である

京都と肩を並べて、もう一つの中心が存するという意識を、人々の
中に容易に生んだ。豊臣氏の居城を有した大坂をそれに加えて、都
市はもはや田舎に對する文化の中心という一般的な存在ではなく、
その一つ一つが有する独自の性格を注目することによつて描きださ
れるようになる。

江戸時代は下るが、浜松歌国「撰陽奇觀」卷之七は南地野面を描
いて「京の四條と違ひ流るゝ水を見ぬかはりに、夜明かたに川端
のきたなきさまを見る事なし」と言う。また、やはり近世後期、平
亭銀鶴「街能噺」では、

萬松さういふことだ。兎角大坂へくると其まゝ足を留る人かいく
らもあつやす。何にしても土地はきれい。人氣はよし其上に金銀
かふんだんといふ国だから。暮すにハレハレはづさ。(中略) 千長
都ちかい土地ゆき。人氣もやさしく。自あくていなごさいいふもの
もすくないと見えやす。アレ御覽じろ六ツ七ツの子供か皆な擡鼻
禪をかけて遊んで居やす。萬松(中略)アレ横町から来る八百屋
を見なせい。尻を、はしよつた上に前垂をかけて居やす。江戸に
ねいことだぞ。

なにと、細かに比較を行う。

内藤昌氏「名所のトポス——歴史における都市の活性——」(「
へるめす」五号)は、近世中期から後期にかけて、名所記の延長線
上にあつて、都市の案内記としての説物の役割をはたした、三都の
名所図合の記事内容を形体要素(建築・土木・自然)、意味要素(行
事・産業・故事)、風土要素(氣候・時刻・季節)の三者に分類
統計して、それ以外の都市の特色をさぐるものである。その結果、
たとえば京都については、「江戸に比して形体要素が多い。それも
へ建築」が主であり、中でもへ社寺」を核とする。「意味要素の
少ないことと相応して考へると、市民の文化行為が社寺空間に沈潜

する傾向を示していると解釈できる。しつた傾向が見てとれるという。もとより名所図合自体が意識して生んだ傾向ではなく、そのような特色を三都のそれぞれが有したことの反映である。そのようなその都市独自の、町の息づかいを、

此草東寺九條に、もはら作り侍る。其かり藍を、七條塩小路の民家の門くくにほしならべて、女は皮に慶ひ、男は市に歌うたふ。

その声屑家の軒をめぐりてやむ事なし。(中略)うき雲の立売わたりは夕立やすらん。西洞院、堀河のなが水、いきほひつよく濁り来るよと見れば、ほひなく東寺九條の空もかきくもりて神なりさはけは、戸棚にとかこもり穴蔵にわけ入し人も、又よそになりゆく夕立の空、藍より青かりし顔の色もころよく、雲は没日の紅粉つけたる。(蘆月庵似船「堀河の水」中巻 元禄七刊)

のように描き出す記事の登場は、やはり「三都賦」(松露庵鳥飼編宝曆三刊、他に山幸包承編、寛政六刊の「日本三都賦」という漢詩集もある。いずれも京都、大坂、江戸の三都の歴史や特色をあげて、たたえるもの。)のような書も下かて生む、また先述したような、紀行文において、その水は次りような、すむれた観察眼で表現力となつてあらわれている。

京は砂礫のやうなる所なり。一鉢雅有て味に比せぬ甘し。然水にも嗜占て美味なし。かろびたるやうにて潤沢なる事なし。奇麗な水は何処やら淋し。(二鐘亭半山「見た京物語」 安永頃)

大阪の市中茶店なし。湯する人は途甲茶にこまるなり。夜行するにも、いこひべき茶店なきゆゑ、松別草取るなり。川筋は船を岸に繋ぎあき、こつにて酒肴を繋ぐ。京の河原の涼にはおと水り。夜店は大かた提灯を出す。京はかけ行燈なり。(中略)京によきもの三ツ。女子、加茂川の水、手社。あしきもの三ツ、人氣の香

香、料理、舟便。たしなきもの五ツ、魚類、物もちひ、よきせんじ茶、よきたはこ、実ある妓女。(滝沢馬琴「器枝漫録」 享和ニ)

田舎人が単にあこがれて仰き見るのとは異なる、未知の都市空間の印象を正確に把握し記述しようとする意識がここにはある。

5

近世の人々の政治的意識あるいは関心といったものについて、しばしば考へさせられるのは、三都をはじめとして、近世紀行文に大きな役割をはたす、具体的には、よく登場する都市が、いずれも何らかの意味での、政治的に重要だった都市であるということである。その点では鎌倉も見逃せない都市なのであるが、單記物との関係、近郊旅行の性格といった別の問題もかかわってくるため、こ水は、稿を改めて述べたい。

ここでは、他に、同様の点から、近世後期の紀行文によく描かれる、長崎と松前について一言しておきたい。

二つの都市はいずれも鎖国の時代にあつて、前者は唯一の交易の窓として諸外国に開かれ、後者は、蝦夷を管理して北方のロシアと対していた。そ水はどちらも中央から最も遠い辺境にありながら、異文化の窓口として、独特の雰囲気をもつて、隆盛をきわめていたようである。

市家すべて花美に走り、凡の人平生衣服調度等も他方より懐奢に扱ひ、諸事華美と表とする風俗は、古来より異国人乗船の地な水は、我朝を飾る気の張より出る事成べし。(中略)素より異船の渡来により利益の儲も有、繁昌の土地ゆへ業も叶へるに寄へし。官よりも他所とはかはり、課税も免さ水一歳のうちには御合力銀等も下るよし。(林英存「旅繁道草」長崎の項、文化元)

何れの館も用權え、玄圃に至るまで、江戸にていはば諸侯の館の

ことし。一浦二浦のわづかなる食地といへども、海浜よりあがる荷物の運上はかり難し。武家の風俗よく制度も正しく、たのもしきこと多し。(古河古松軒「東述雜記」松前の項、天明七)

「東述雜記」は別に江指町の項で、「世にいふ、松前の地にては昆布を以て屋根を葺きし所もありして、甚だあしき地のやうに風聞し、人物・言語も日本の地よりしては大いにあつりしことと人びと思ひしことなるに、かゝるよき町のあらんとは思ひも寄らず、見る者ごとにあきかしくなり。こ水らをもつて天地の間をさるる地は、はかるべからず。しと述べる。二都市については紀行文によつてはこ水ほどの評価をしていないものもあるが、そ水にしても、辺境にこのような都市が出現するといふ、そのこと自体が、中央と地方という、中世以前の紀行の枠を根柢から崩すものであった。更に三都の場合と異り、このような辺境の紀行文においては、現地を見聞したことのない談者たちの、既存の常識では空想しにくい都市の現状を、正確に伝えることか作家たちには要求された。そ水は必然的に、詳細な観察と表現による、常套的でない都市の描写を生む。

(紅毛船か)津内出入の時は、櫓をおすかはりに石火矢の空筒を發す。一度に二挺ヅ、左右かはるゝ打出し、よじ水く、引船にひかれて出入するせ。出島より海口を出る迄に二百発の餘打出す。この時は長崎中地震の如し。列へおく諸道具もかりくするなり。(長久保赤水「長崎行役日記」明和四)

且説当地の商民、四方の旅客、市中に充滿し、夜は殊に賑はしく、商店みな燈着燭台を灯し、鬧々熱々として売買頗る繁雜なり。按摩笛、蕎麦の聲、觀相などの音、引もきらす。斯して四ツに至れば飾をさす、門戸を封じて夜を送りぬ。(平尾魯遷「松前紀行」安政二)

このような觀察眼や取材の姿勢が定着してくるとき、そ水は、も

はや、三都をばじめとした著名な都市のみにとどまるものではない。別表の、特に後半の「松堡里山荘に遊ぶ」の記の山田の町、「加越日記」の大野の町の描写に見るやうに、平凡な地方の小都市にも、そ水が水他と異なる特色を見つづ、全体像を把握する姿勢は、次第に紀行文において一般的なものとなる。

都市を描くといふことは、いいかえれば、風景美や、非日常の緊張感よりも、人間の日常生活の場に興味をひかれ、美を感じるということでもある。そういつた点では、山本篤慶「山陰四州採葉記」(天保三)の、次のような記事もまた同様の性格のものであろう。

(王子村は)村西劇場ヲツクリ戯ヲ演ズ。絃鼓ノ声耳ヲ聒フス。夫ヨリ右道ニ至ル。村中烟草ヲ鬻カ。佳品ナリ。又馬堀ヲ過テ龜山ニ至ル。民居輻湊数千ニ近シ。城ヲ出テ西北ニ行事敷町、宇津根ニ至リ河ニ猶テ並河ニ至ル。村中燈籠炒ヲ植ユ。觀美ナリ。(中略)八木ニ至ル。邑中、草練ヲ鬻カ。八木綿ト云。

「村」といつても、こ水らはすべて、人のひしめく小都市に近い生活の場である。たてつけに道傍に登場してくる、それを木の、そのような村を、作者は一言で、特色をとりえて描写しさる。こ水は、人間の生活する場をすばやく觀察する能力を要する。美景を描くのではない。人の生活を描いて、村の性格を表現するのである。この作品は佳品だが、特にすばかた傑作ではない。そのような作品にも、このような叙述は、近世末期には自然に登場するようになる。

6

近世に入つてから起こった、都市への人々の流入と、都市自体の觀光化、地方文化の発展と、そこからの出身者による新たな視点、新興都市江戸の台頭と、そ水による都市文化の相対化、辺境における都市の出現と、その報道の必要性、などから、近世の紀行文が、都市及び都会生活を描くといふ、中世以前の紀行には存しなかつた

新たな性格を備えていく過程を見てきた。自然の風物のみではなく、都市と、そこに生きる人間生活がどう描かれていくかというところは、近代以降の紀行文を評価する際には、むしろ、普通の基準であろう。だが、近世の紀行文もまた、徐々に、既にそうなりつつあったということになる。やはり、個々の作品の鑑賞の際にも、自然の風景描写、辺境での冒険記、奇談異説の紹介、といった点に加えて、都市滞在中の日常生活の描写（別表中の寛政十二年、大江丸旧園の「あかたの三月四月」はその大半がこれである）をもまた、充分に、旅中の記事としてとらえ、評価もしなければ、その面白さがわかるまい。具体的にこそさまざまの問題を生いさせると思うが、一考を要する観点として提示しておきたいと思う。

付記 本稿は昭和62年度西日本国語国文学会において口頭発表したものに、加筆削除した。

— 福岡教育大学助教授 —

注・文中及び別表中の地名の表記は、原文に拠る。

別表（×印の作品は都市の描写を有しない。）

治承四 久我通親「高倉院巖島御幸記」×

貞応二 源光行「海道記」×

仁治三 源親行「東関紀行」 篠原・豊川

豊川といふ宿の前を打ち過ぐるに、或るものゝいふを聞けば、此の道をば、昔よりよくなるかた無かりし程に、近頃より俄に、渡津の今道といふ方に、旅人多くかゝる間、今は其の宿は、人の家居をさへ、外にのみ移すなどといふなる。旧きを捨て、新しきに就く習ひ、定まらることと云ひながら、如何なる政ならんと覺束なし。昔より住みつきたる里人の、今更みうかへんこそ、彼の伏見の里ならぬとも、荒れまく惜く覺ゆ水。

文永頃 阿仙尼「うたゝぬの記」×

元享と文和 増基「熊野紀行」 住吉

其より二日といふ日の夕暮に、住吉に詣でつきぬ。見れば遙かなる海にて、いと面白し。南には江流れて、水鳥のさま／＼なる遊ぶ。海人の家に十あらん、葦垣の屋のいと小きともあり。秋の名残、夕暮の空の景色も、唯ならぬいと哀水なり。

文和二 二条良基「小島の口すさみ」×

元中頃 頼阿「高野日記」×

銀応頃 宗久「都のつと」×

貞治三 足利義詮「住吉詣」×

康応元 今川貞世「鹿苑院殿敷島詣記」×

応永十五 一条経嗣「北山行幸記」×

永正二十五 正徹「なぐさめ草」X

▽もる山といふ所は、いたく心も留まらず、森の陰の一村
里にて市め商人の物さはがしきのみなり。時雨もいたく
なご覚ゆるも、今は時ならずや。

永正四 宗長「富士御覽日記」X

藤原雅世「富士紀行」X

寛正六 義恵「善光寺記行」X

応仁六 一条兼良「藤川の記」 垂井

五日の申の時ばかりに、垂井の宿に着く。今日は南宮の
祭として、見物の輩ものさわかしく立ちさまよひけり。風
流の山傘などありとかや。

文明五 正広「正広日記」X

文明十二 大田道灌「平安紀行」X

同 宗祇「旅紫道記」 津の市

かくて行過ぐ程に、民屋一むらあり。津の市といふ。左
りに川流れ、海つらはや、入りて物さびし。

文明十八 准后道興「廻国雑記」X

明応八 藤原雅康「関東海道記」X

永正六 宗長「東路の津登」X

大永三 実隆「高野参詣日記」X

天文二 尊海「あづまの道の記」X

天文十三 宗叔「東国紀行」X

天文十五 北条氏康「武蔵野紀行」X

天文二十二 三条西公條「吉野詣記」X

永禄十 紹巴「富士見道記」X

天正元 藤原超通「嵯峨記」X

天正十五 細川滋齋「九州道の記」X

天正十八 同「東国陣道記」X

天正二十 蒲生氏郷「紀行」X

文禄元 木下長嘯子「九州の道の記」X

元和二 林羅山「丙辰紀行」 浅草

爰に寺あり。た小とぎ観音ましますとて、人の多く参詣
すと申ければ、大士の日、人にこそは水余もまかりける。
げにも人のいふやうに、男女の群集する事、京の清水よ
りもおほく見えける。

元和三 徳永種久「上下紀行」 江戸その他

日本橋こそゆゝしけれ。聞きしに優る江戸の体、昼夜駒
の足音に、旅人の夢や賞すらん。仙臺棟を並べつゝ、民
の空題は軒つゞき、見るに心も角町の、刈らぬと名をば言
原の、町こそ猶も栄えけれ。

元和六 中院通勝「袴袂」X

元和八 中院通村「関東海道記」X

元和十三 鳥丸光広「日光山紀行」X

寛永三 多田満泰「官川日記」X

寛永十五 藤原氏成「後鳥羽天皇御参詣記」X

寛永二十 徳永種久「東めぐり」 江戸

物の本屋を眺むれば、内典外典和歌の道、数々云はんは
限りなし。古へ今の言の葉と、異國の事を引きませて、
筆に任せてつらぬけり。引て運ぬる数珠屋には、言葉も
さのみ交さかれ、言ふより早く水晶の、玉にも曇る事あ
らば、事畏こくも裏表、通さん事の取かしや、通して其
身名を場る、その天下の文敷こそ、八十餘矢と伝へ聞く
か、その文敷にあらぬは、結ひ花に唐物屋、紙屋三薛絵屋指
物屋、鮫屋薬屋贈物屋は、売を並べ見えにける。猶行末

は萬町、今を始めて陸奥の、果まで隠れなかりける、日本橋にも着にけり。

寛永頃 藤原為景「嵯峨遊覽記」X
寛文七 池田綱政「丁未旅行記」 住吉

今日は住吉の物見として、老たる若き男女貴賤を別かか、近きあたりの園里より集りたる人、さしも海につぎたる松原より、本社の内まで、所空きさまなり。或ひは暮を引き或ひは仮屋さうち、袖をつらぬてどよめく音、何のあやめも聞えず。

貞享元 芭蕉「野ざらし紀行」X

貞享二 去来「伊勢紀行」X

元禄二 貝原益軒「西北紀行」X

元禄五 椎本才庵「推の草」 高砂

高砂は町並立続きて、繁華の控ひ、尾上の底の鳴くべき秋とも見えず。

元禄八 梅月堂宣阿「富士一覽記」 名古屋・知立

此所の市はその名高きさとして、行て見るに、近き園遊き邑より、市女あき人ども来つとひ、仮屋の軒を並べて、酒は平原より和め、茶は翟山より集め、漢官の執素、新殿の鳳御、みちのくの忍ぶ摺、つくしの綿を蓄へかざり。此東なる野らには、甲斐信濃の牧の荒駒を引つらぬ、渚の種大宛の産なご街のつしり、侘儒俳優僞師の類ひまで集まり来りたれば、紅の塵空にみちて素衣も給となれる、長安の街に異ならず。

元禄十一 安東升翁「常陸帯」 品川・宇都宮・平方

品川の宿に入りて行く、人脚繁く賑ひつゝ、旗下の諸士馬乗物の行旅、大路も狭く行違ひ、市町貨を鬧いて、

人はかへりみる事能はず、車は廻る事を得ずと、班固が西都の賦に書けるも、よそならず寛ゆ。瓦甍の雲に聳へ、雉堞の日に耀きたる、細柳官の御城居は申すも更なり、侯伯子男の朱、高館に、金と鏤め玉を飾りたる、目もかゝはゆき心も空にぞ賞之侍る、見ぬ諸趣は知らず、聞伝へたる大内裡の昔、鎌倉室町の中頃、安土大阪の繁華とて、今の江戸に較へては十分が二三なるべし。大凡我が帝六十餘園の中に、匹なぎ天府の地と覚ゆ。

元禄十三 嵐雪「装遊稿」X

元禄頃 磯一峰「こし地紀行」 高砂・府中・金沢

小野市松任など過て金沢に着きぬ。園の守おはず所なれば、わきて賑へり。商家軒を比べて、朝餐夕餉の煙二里にも立続くべし。犀河浅川なごいふ橋は、淀伏見にも劣るまじ。人馬の足音絶る間もなし。

享保五 武女「庚子道の記」 江戸

たゞ過にすぎ来て芝にまゐる。こゝより大路のさま、貴き賤き袖をつらぬ、馬車たてぬぎに行かひ、はえぐしく賑はへるげしき、七とせの眠一ときに覺めし心地して、嬉しと言はんかたなし。

元文三 山崎北華「蝶の遊」X

延享二 横井せ有「熱海紀行」X

宝暦頃 湯浅常山「東行筆記」X

明知四 長久保赤水「長崎行役日記」 長崎・小倉・室・高砂

延享明知頃 一鶴堂白夷「三浦紀行」 浦賀

西の方愛宕山へ登りて見るに、人家凌の西岸に列り千軒餘り、濠は入船にて、幅百廿餘間、奥へ長く十町許、海の深さ十一尋と云ふ。東西の町に、里正二人、官舎の目

見の町人七十餘人、回船の間丸百廿餘軒、三才高山にて
屏障を建たる如く、東南の方濠の口に海関在りて衛士是
を守り、濠の周圍凡て四十九町程、万国の客船其中に在
り。東武の要害、海上咽喉の地なり。

明和安永頃 上田秋成「秋山の記」X

安永三 杵杷園士朗「幣ふくろ」京都

十余四の日は、思ひ辨たる祭りなれば、加茂に詣で侍り、
人押合る松の下に、後へ／＼と押ひさらせて、今や御車
の渡らせ給ふとして、叱り弄めくに猶もうごめきぬれば、
官人の通り給へる道さへに塞がりぬ。

安永四 且水「佐渡日記」X

安永五 成島和鼎「道芝の露」X

安永六 小磯某女「奥の荒海」青森・府中

青森といへる処に宿る、爰は津輕第一の港にて町々数
あり。長さは一里餘に及び、安かた町なといへるも此所
にて、漁人の住る家居八百軒、なべての家居三千有りと云。
外浜九十三里の程と、南善知鳥の官などある処から、彼
方此方見やらるゝに、海邊にて之も言はずよし。

安永頃 二鐘亭半山「見た京物語」京都

天明七 村田春海「椿まうでの記」X

同 二畳庵蘭芝「瓜じるし」X

寛政二 伴蒿蹊「津島祭記」X

寛政六 加藤千蔭「香取の日記」X

同 本居宣長「君のめぐみ」X

寛政七 成島峯雄「小金の御狩」X

寛政十二 大江丸旧園「あがたの三月四月」江戸

享和元 大田南畝「改元紀行」畑・丹川・浜松、二川・岡崎・桑

名・水口・その他
ま和二 同「壬戌紀行」大坂・高崎・熊谷・その他

熊谷の駅に水は道は、岡部よりもひろく、人家こと
賑ひて江戸のさまに似たり。木戸にいらんとする左の
たに蓮生寺みえしか、日高ければ宿につきて後にみんと
て行過しぬ。人家に即席御料理など書けるかんばんあり。
葉うるものゝ軒に出せる招牌に、葉種とかける文字は
めて楷書に書きて、江戸の葉舗に異ならず。去年東海道
よりはじめて京大坂の町々をもみしに、葉種の文字は
なら草書にかきてみえしか、けふはじめて江戸に水
る心地す。かばかりのものも故郷なつかしく覚ゆるは、
旅人の心なるべし。

文化四 清水浜臣「杉田日記」X

文化六 熊谷直好「船路のゆき」おむと・鞆・大坂

此おむとの港は、家なども高がかにたちつきて、この
あたりにほき所なり。上なる岡には、いかめしき社あ
り。かたはらには寺もあり。

文化八 鈴木牧之「苗場山に遊ぶ記」X

文化十三 成島司直「みるめのさち」X

文政元 香川景樹「中空の日記」X

同 只野真葛「磯つたひ」X

文政二 田能打竹田「豊後紀行」大坂

難波に留まり給ふ。おの水か宿りせし家の前に橋あり。
よとや橋よなんいふ。此橋をわたる人たえず、夏の日の
暑きでもいとほで商物持ひもてくるもあり。たをやかに
粧ひたる女、わりこめく物持たせたる従者打具し、ある
は駕籠に乗りたる人きになひなり、おのかじしなる世の

文政七 小笠原長保「甲申旅日記」 畑・湯本・箱根
湯本の茶屋町として、挽物細工売る家を許多あり。右の方
邊の谷に葦屋夏ゆるか、温泉の在る処なりとぞ。

文政九 黒崎貞孝「常陸紀行」X

文政頃 松田直元「夢のしをり」X
天保四 大梅居梅外「松堡里山荘に遊ぶの記」 山田

細浦を経て山田の町に入る。古き船板以て二三十間板塀
の様遣り渡りたるあり。何する處にやと佇立みた水は、
板はつる手斧の音、釘打つける玄翁の響き、丁々々々と
聞えて、是なん船造る小家にぞ有ける。昔か家もの軒
端低う建続きたる。日頃汐風の荒き故にやあらん。八十
に餘ると見ゆる老翁の、網の破れを綴り居るあり。留守
の戸守る女房の髪は蓬に乱したるか、ほまち物にや鬼灯
桃の実なんど所兀たる盆の上に取並べて売るあり。(中
略) 席暖簾かけ渡したるは、蔭繩席礫石或は鋤鍬の柄な
んと売る家なり。黒き格子に簾垂込めて葦其昌とか云へ
る書風もて札掲げたる。医師と思はる。いさは物売る家
二軒並びたる。鮮臭き香の往來の衣も染りやせん。(下
略)

天保六 箕川翁「伊豆国懐紀行」 長坂・高輪・輕井沢・長崎村

暫し行きて長坂と云ふ所に出水は、名にし負ふ長さ下り
坂にただ木建たる町家の蔭に、いと白う霜を置たるは、
遠に流るゝ谷川などの浪立てる様にも似たり。

天保以前 土屋斐子「たびの命も」 浜松・桑名

▽よろづ所を得てもあつかひ、従者などい小もの、あは
れなるぞも思ひやらず、みやびなる心もなし。さるぼと

文久元 近藤芳樹「梅桜日記」 伏見・宇治・大坂

申の時ばかりに網島まで来ぬ。桜の宮、樋の口の桜、け
ひを盛なりとして、なには人、綾をかざり錦さたち、花見
に出たる、陸にも川にも余るまで、満みたり。

明治十三 同「加越日記」 敦賀・大野

夕かた秋夫ぬしに伴はれ、大野の町を見る。抑も大野は、
山深き中に二里餘打ひらけたる所にて、四方の見わたし、
すべて山なり。されど人家多く、壁横六筋にわかれて、
直くとほり、西京のさまに似たり。町は広く、横の筋
はいつれも中に川流る。其水源は町はづれ南のかたに大
きなる泉あり。そより六筋に引わたたり。壁の筋七間
町通は日まぜに市あり。其さま町は、広げれど、左右ニ
行に、市人近きあたりの村々より、野菜種々の物を持ち来
てうるなり。其中筋き人かよひて買ふめり。いと賑は
し。さて土井侯の古城跡を見るに、矢倉一つ昔ながらに
て、大かたは島となり、石垣わづかに残りたるものから、
昔のさま更になし。ここのみの事ならぬと、いとあさま
しきこゝちず。